

資料 第2回ワークショップでの各グループの議論の結果

第2回 地域環境学習経験交流ワークショップ（2008年11月4日実施） グループワーク～地域環境学習を進めて行く上でどのような情報が私たちに必要なのか～ 各グループ要点

■赤チーム（中川、彦坂、高山、牧野、後藤、織田、鈴木、樋口）

□どのような人材を必要とするのか

- ・虫に詳しい人
- ・三市に虫の専門家がどの程度いらっしゃるだろうか
- ・ホテルの生息環境の整え方について詳しい人
- ・野川の生き物に詳しい人
- ・崖線の植物をよく知っている人
- ・地質に詳しい人
- ・水に詳しい人
- ・野川の水質に詳しい人
- ・水質汚染に詳しい人
- ・大気汚染に詳しい人
- ・1年生活 「虫とともにだち」野川 虫のいる場所 とり方を教えてくれる人 大妻女子大 先生他
- ・1年または2年生活科 四季の変化を遊びを通して感じとらせたい、そのGT（ゲストティチャー）
- ・玉川上水の歴史に詳しい人
- ・4年社会科、梶野分水など昔の小金井の様子を知っている人
- ・4年総合 「野川源流探険」見学と一緒に行っていただける方
- ・3年総合 「私たちの町 小金井」野川 ハケ 今と昔の様子を語ってくれる方
- ・子どもの前で講習ができる農家の方
- ・映像の操作が得意な人
- ・コンピュータの操作に長けている人
- ・専門をもった学生ボランティアがいると良い

□環境教育教材の情報

- ・玉川上水の自然と文化の教材集や冊子があると良い
- ・1年または2年「生活科」野川 四季の変化を遊びを通して感じとらせたい方法を教えて欲しい
- ・野川の教材週があると良い
- ・学校の教育実践の資料整理が必要、情報の整理（教材の整理につながる）

□教育実践や成果の事例

- ・学生が支援した事例はないだろうか
- ・子ども驚き、発見をしたという教育実践事例を知りたい
- ・他の学校の年間指導計画を知りたい（他校ではどんあことをしているのか）
- ・教育実践の成果を知りたい
- ・学校側の年間総合学習計画を知りたい
- ・継続した教育実践の事例と子どもの成長
- ・学校単位で進んでいる環境学習の進捗状況、またその成功例・失敗例（具体的に）

□学校

- ・学校が求める観察内容
- ・小学校の環境学習では今何が必要か
- ・学校の器材の活用
- ・学校図書室の本を子どもに紹介したい！

□助成について

- ・謝礼はどの程度なの？
- ・助成に関する情報が欲しい

□ネットワークについて

- ・各情報を整理し、ネットワークをつくれれば幅が広がる
- ・市民活動団体が独自に行っている活動（定期的）や把握している（環境）データなどを知る方法
- ・地域独自あるネットワークの把握

□環境に関する情報

- ・野川の源流からの湧水量の経年変化資料、入手するにはどうしたらいいのか
- ・玉川上水の水（清流）を野川に流すことで、小金井、国分寺での水辺が豊かになることが可能となる。
- ・野川に関して東京都の行政側の姿勢（住民対応の姿勢、都は建設局のみか）
- ・大学は三市の環境情報を統合するアカデミーを創設すべき
- ・インターネットから役立つ情報（野川や崖線）の整備

□ワークショップのディスカッションで、述べられたこと。

- ・大学生はこのワークショップに参加して、何を感じ、何を考えたのか、それを知りたい。
- ・学校は教育実践事例をもっているが、それを整理しきれないでいる。整理することができれば、他の学校や地域と連携した環境学習に役立つ。大学生がこうした整理に関わってくれないだろうか。
- ・総合の時間は減ることとなった。環境をテーマにしっかりとした、また効果的な学習プログラムが提案できれば、学校もそうした情報を活用したいと思うはずである。

■黄色チーム（浜田、藤井、佐藤、布、生田、原子、遠藤）

□学校における、地域素材を使った環境教育の実践事例がほしい

→環境教育はまだ新しい分野で、学校教育で何をどのように行えばよいのか、分からない。これまで学校で行われた環境教育の具体的な実践事例集があると、イメージが湧き、教員同士で意識の共有もできる。

□環境教育の教科における位置づけや、学年ごとの理解度が分からない

→学校サイドとしては、環境教育がどの教科や時間、そしてどの単元で扱えば良いのか、指導要領や指導書に明記されていないため、分からない。

地域住民や団体サイドとしては、各学年における児童・生徒の習熟度や指導内容が分からず、授業を組み立てる時に苦労する。

□ゲストティーチャーとなり得る人のリストや、学校との調整役がほしい

→学校サイドとしては、地域でどのような方が、どのような知識を持ち、どのような環境教育活動をしているのか、分からない。ゲストティーチャーとなり得る方（団体）と活動内容のリストを作り、リストを管理する機関を設置してほしい。

地域住民や団体サイドとしては、自らが持つ環境教育の知識やスキルを学校教育の場で活用してほしいという思いがある。しかし、学校へのアプローチをどのようにすれば良いのか、分からない。

□自治体や、団体、企業などから情報を得て、授業作りに反映させたい

→特に近年、多くの企業が、様々な地域貢献活動や環境教育活動を行っている。それをヒントに授業づくりができないか。もしくは、企業に実際に学校現場へ来て、講座をやってもらえないか。

□総合の時間だけでなく、理科や社会科の指導要領にあった地域素材があるとうれしい

→環境教育というと、総合的な学習の時間で取り扱われることが多い。しかし、理科や社会科、家庭科等の教科教育で、環境教育を扱うことはできないだろうか。各教科の教材として使える、地域の素材があると良い。

□大事なことは、熱意と予算だ

→教員は多くの仕事を抱えており、さらに環境教育を実践するとなると、多大なエネルギーが必要となる。また、各学校に分配される予算は限られており、その中で行える教育活動は限られる。このような状況下で環境教育を行うためには、教員が環境教育の研究に費やす熱意を持ち、環境教育実践のための予算枠を設けることが必要である。

青チーム（山田、藤崎、古川、神山、宮本、山根、馬場、木村）

□環境に関する知識や情報

- ・生き物（セミ、ツバメ、）や自然環境（水質など）のデータ
- ・三市の歴史（玉川上水、ハケ、野川）について
- ・生物多様性について
- ・環境についての正確な知識（環境活動の根拠となるような知識）
- ・植物の育て方

□環境学習を行える人材についての情報

- ・学習の際に資源を提供してくれる人
- ・環境の専門家
- ・おもしろい先生
- ・自然の大切さを教えてくれる人
- ・体験の場を提供してくれる人

□学校教育等の情報

- ・教育委員会の考え方
- ・環境課の考え方
- ・各学校のテーマ
- ・総合的な学習の時間についての考え方
- ・教科学習との関連についての情報

□他地域の情報や、環境学習推進のための情報

- ・他団体とのネットワーク構築のための情報（あるいは活動のバッティング防止）
- ・自分達の学習の場
- ・環境活動の効果や評価
- ・住民の声
- ・行政の計画

以上、青チームの意見を4つのグループに整理した。その中で、環境に関する情報や人材の情報が必要であるという意見が多かったが、それだけでなく自分達がよりよい環境活動を推進するための学習の場やそのための情報が必要だという前向きな意見が出された。

■緑チーム（瀧本、松原、石原、星野、沢畑、河合、増沢、押田）

【基礎データ】：欲しい情報は多岐に渡ってたくさん有る。また、提供できる情報もある。
しかし、それらの情報がどこにあって、どういう方法で入手できるのかわからず、
地域住民は困っている。

■基礎データ：欲しい情報

生きもの・環境：生態系、科学的知見、水・土・大気、湧水、
生命のみなもと、自然の摂理、食物連鎖、環境汚染・浄化
玉川上水に関する虫・鳥・花・生きもの
生活：ゴミ（分別、資源化）、水質問題、食育、健康
地域：歴史、文化

※関連する資料の所在は？自治体はどんな資料をもっているのか？

□基礎データ：提供できる情報

水辺の国勢調査のデータ
有機農業、生物多様性
地産地消、
有用微生物、EMの働き

【人・グループ】：人に関する情報は、地域で活動する上で必須であるにも関わらず、殆ど把握できていない。自治体には基本情報はあるものの、本当に欲しい情報は口コミによるところが大きく、情報の拡充が求められる。

■人：欲しい情報

人材バンク、口コミ、講師を招く方法、活動に使う機材、
子どもの成長段階に応じて欲しい専門家、
玉川上水の環境に関して市民レベルで活動している人々
地域のスペシャリスト、環境に詳しい人、謝礼、など

■グループ：欲しい情報

地域に存在するグループ、どんなカリキュラムがつけられているか？
環境・自然を守ろうというグループの活動内容

【管理主体】：行政が何を持っているのかが分からないという現状と、欲しい情報と提供できる情報との間に乖離が生じていた。今後は、本当に欲しい情報が何であるかを把握し、的確に情報開示する必要性が示された。

■管理主体：欲しい情報

子どもがかかわれる活動と管轄の連携
行政上の管理主体を明確にした上で玉川上水
でどんな活動が可能なのか？

□管理主体：提供できる情報

環境に関する助成制度、
環境に係る規制

【学校】：各学校でどういったカリキュラムが組まれているのか、各学校における総合学習の捉え方など、具体的な「学習内容」に対する意見が多く出た。また、野川や玉川上水など、校区の身近に環境学習の素材となるものがある場合はよいが、そうでない場合、何を扱えばよいのかなどという意見もあった。

■学校：欲しい情報

他校での玉川上水における学習の実践例、
学校の総合学習の捉え方、玉川上水が扱われる教科、
どこの学校でも活用できる環境学習の情報
保全と住のかねあい

□学校：提供できる情報

環境教育の場としての
「田んぼ」

【地域における環境学習継続のためには？】：上記で出た情報の多くは、環境学習を実施している学校や行政が持っている。しかしながら、担当者や教員の移動によって、せっかくの情報が埋もれ、円滑に活用出来ていない実態があるのではないかと？

学校と市民団体、管理主体、をつなぐ
コーディネーターの必要性

※これらの情報を統括・管理するコーディネーターの存在があれば、学校や行政組織に移動があっても、維持されるのではないかと？

【最終目標】

開発した学習コンテンツの継続（学校・コーディネーター・支援者・行政）